

# 跡見学園女子大学学芸員課程 2021年度博物館実習について

跡見学園女子大学 学芸員課程 主任教授  
村田 宏

博物館実習は、昨年につづき新型コロナウイルス感染予防対策のため、当初の予定に変更が生じた。

\*\*\*\*\*

## (1) 春学期における、通常授業時の基礎実習、一日の行程で実施する見学実習

学芸員課程履修生にとって貴重な体験となるべき見学実習は、遺憾ながら実施見合わせとなった。また、基礎実習は、対面・遠隔の併用による授業となった。

\*\*\*\*\*

## (2) 夏期休暇期間を中心とした学外の博物館・美術館等での学外実習

学外実習は、コロナ禍の困難な状況のなかで、以下の13館で行われた(順不同)。各館には懇切丁寧なご指導とご便宜を賜った。あらためて厚く御礼申し上げます。なお、実習予定館の実施の見合わせ等により学外実習が行えなかった履修生については、跡見学園女子大学花菱記念資料館での代替実習の措置を講じた。

千葉県立美術館 深川江戸資料館 埼玉県立近代美術館 茨城県近代美術館 古代オリエント博物館 わらべ館  
府中市郷土の森博物館 浦和博物館 船橋市郷土資料館 埼玉県立歴史と民俗の博物館 神奈川県立金沢文庫  
練馬区立美術館 東京都江戸東京博物館

博物館実習学外実習参加者の「実習レポート」(5件)を掲載する。

## Y.K.生

### ①学修の内容

6日間の実習を通して、最初の2日間は深川江戸資料館とその財団内の他の資料館やコミュニティセンターについて学んだ。残りの4日間については、他校の実習生と共に「渋沢栄一と深川の関わり」をテーマにミニ展示企画書を作成し、発表した。

具体的に1日目は実習館についての講義など、座学を中心に深川江戸資料館が「博物館」というカテゴリーの中でどのような立ち位置と目的で開かれているかについて学んだ。

2日目は同じ財団内の近隣の資料館やコミュニティセンターに赴き、それぞれの施設がどのような役割を持ち、江東区の人々に貢献しているかを知った。

3・4日目は「渋沢栄一」をテーマにミニ展示企画書を作成して、発表した。1度目の発表では実習生たちがそれぞれ自分の力だけで企画案を出し、2度目の発表で全員の案をまとめたものをグループ発表した。この時案がまとまり次第、実際にそれに必要な展示物や資料をまとめて、展示パネルを利用した発表の準備に取り掛かった。

5日目は年中行事の七夕飾りを準備し、それが終わり次第ミニ展示企画の準備を行った。最終日はそれまでの期間に取り組んできた企画展示の最終準備をした。その後、実習担当の方々に発表し、その評価と1週間の講評をいただいた。

現在年中行事の合間に展示されている実習生によるミニ展示は、来館者により伝わりやすいようにレイアウトなどが少し修正されている。

### ②実習でもっとも勉強になったこと

深川江戸資料館が他の博物館と大きく異なる点は、職員が公務員のように部署異動があることだと思う。その為、館内の展示に関する説明はボランティアスタッフによるもので賄われている。この形態を取ることで、部署異動があっても変わらずに運営できるという点が最大の強みであると感じた。しかし、これは職員同士の連携はもちろん、ボランティアスタッフとの連携も視野に入れなくてはいけないため、「博物館としての理想と現実」を考えた際に、とても難しい問題であると痛感した。

深川江戸資料館では、ハンズオンの展示品が多いことから閉館後にすべての資料の点検、季節によって音響や店先で並ぶ商品、家具などを少しずつ変える必要があることを改めて学んだ。また年中行事では実物を利用して再現することで、現代に息づく行事やその行事のルーツをわかりやすく解説している。よって老若男女問わず楽しめる非常に満足度の高い展示を可能にしていることが分かった。さらにハンズオンの最大の特徴として「壊れることが前提である」と知った。レプリカを展示品にすることで厳密には、一次資料の破損の心配がないというのが、来館しやすい博物館を形作る一つの要因になっているのではないかと考える。私はこれが非常に有用であると感じた。これらのことが可能になることで、小さな子供や日本語がわからない外国人観光客でも「実際に触れる」という体験から気軽に来館しやすくなるのではないと思う。

深川江戸資料館では外国人観光客にとっても人気があることを初めて知った。私は下町の小さな資料館というイメージが強かったため、江戸の暮らしを知る最適な環境であることを改めて考える機会になったと思う。近年は新型コロナの影響により、外国人観光客による来館者数が低下しているが、それをどのように補うかが課題であると知った。

最後に実習を通して企画展示を構成する際、だれか見ても分かりやすい展示を作るのはとても難しいと痛感した。普段何気なく訪れている博物館の展示は、開催までに学芸員やそれにまつわる専門の業者の方がどれだけ尽力していただいていたかを考える機会になった。



## R.M.生

### ①学修の概要

2021年6月17日から25日の間、私は「埼玉県立歴史と民俗の博物館」にて行われた博物館実習に参加させていただいた。実習人数は20人と、例年より人数を制限した実習となっていたのだが、他大学の他学部など、分野の異なる学生との交流も行ったため、非常に有意義な実習であったと言える。

「埼玉県立歴史と民俗の博物館」では、6日間の実習日程が組まれており、博物館の資料や施設、環境に関する講義形式の実習や、実際に資料を扱ったり、体験学習に参加させていただいたり、様々な体験を行った。

実習1日目の午前、挨拶や事業の概要説明などを中心に、博物館がどのような活動をしているのかといった事を学び、午後には博物館の資料・施設・環境に関する実習として講義を受けた後、バックヤードを見学させていただいた。ここでは空調機械室や変電設備など、普段入ることも見ることもできない場所を見学できたため、博物館の见えない工夫を改めて知ることが出来た。

2日目の午前、体験学習として勾玉づくりと藍染めを行った。ここでは体験するだけでなく、実際に体験した中での問題点や改善点を見つけ、班ごとに発表するといった実習になっており、実習は学ぶだけでなく自分たちで問題点を見つけ、改善点を見つけることも大切なのだと感じた。午後は広報に関する実習として「若い世代の来館者を増やすためには、どのような事に取り組めばよいか」という課題に対する改善方法を班ごとに話し合った。中でも博物館のホームページに関する意見が多く出たことから、博物館内だけではなく他の部分に関しての工夫も大事なのだと改めて考えるきっかけになった。

3日目は資料取扱実習として、午前に歴史・古美術資料、午後に民俗資料を使用した実習が行われた。歴史・古美術資料では、掛軸や卷子、陣笠を扱い、資料を扱う際の注意点や長期保存する際の工夫など、様々なことを教わった。また、民俗資料では現在は使用されていない資料や形を変えて現代に残っている資料などを用い、小学校3、4年生向けの体験用プログラムを考えた。プログラムの条件として、授業時間や児童数が予め設定されており、どの資料を用いるのか、時間配分はどうするのかなど考えることが多かったため少し難しかったが、博物館が普段体験プログラムを考える際に大事にしていることなどを知ることが出来た。

4日目の午前、考古資料を扱う実習で、レプリカを含む土器を使用した梱包作業を体験した。土器の梱包作業は初めて行ったが、土器の形に合わせて梱包の方法が異なっていたことから、土器を守るためには最適な形で梱包することが大切なのだ感じた。午後はIPMに関する実習として、収蔵庫や地下のバックヤード周辺の虫の調査と収蔵庫の清掃を行った。前半の虫の調査では虫を収蔵庫に入れない工夫を見ることが出来たが、外から持ち込んだ資料と一緒に虫が入ってしまう場合もあるということを知り、常に虫がいない状態が続くわけではないことを知った。後半の収蔵庫の清掃では柵2個分の資料を清掃したが、

月に2回清掃を行っても全ての資料の清掃が完了するまでに数年かかると言われ、資料を守るためにはとても長い時間がかかるのだと改めて知ることが出来た。

## ②実習でもっとも勉強になったこと

博物館実習の中で一番印象に残った体験は、5日目と6日目に行われた展示実習で、実際に展示ケースを使用して展示を考えるといったまとめのような内容となっていた。この展示実習で私たちの班は「土器」を用いた展示を考えることになったが、土器についての専門的知識を持っている人がおらず、展示構成を考えるのに時間がかかってしまった。しかし、キャプションの大きさや内容、資料の配置位置など展示を見る人たちのことを考えながら完成させた展示はとても達成感があり、自分自身の学びに大きく繋がった実習であったと感じた。また、この実習を通して、授業だけでは見ることのできなかった博物館の裏側や、博物館や資料に関する様々な知識を身に付けることができ、この6日間の実習は私にとって貴重な体験となった。今後はこの実習で身に付けた知識を様々な場面で活かしていきたいと考えている。



## K.K.生

### ①学修の概要

茨城県近代美術館で8月6日～8月12日（10日は休館日）の6日間、実習を行った。初日は館長のお話や美術館について勉強する座学が中心で、実習当時に開催されていた企画展『いわさきちひろ展』の鑑賞もすることができた。

2日目は茨城県近代美術館が毎年実習で行っているという野外彫刻の洗浄と保存処理を行った。隣接している県民文化センターの前にある彫刻を洗剤で洗浄し、最後にワックスを塗って保存処理をした。午後は「アートバンク」という、作品についてみんなで語り合う鑑賞会を体験した。自分とは違う見方や考えを聞くことができるのがアートバンクの面白い点であった。また、掛け軸の取り扱いも実際に行うことができ、授業ではコロナウイルスの影響もあり実際に掛け軸を触ることができなかったので自分の手で扱う経験ができてよかった。

3日目はワークショップの視察と図書資料整理を中心に実習を行った。私自身あまり美術館のワークショップに参加することが少ないので実際の様子を見学できたことや、小さい子供がどのように体験しているのか見ることができたのは貴重な経験となった。またこの日から、実習の一番のメインである常設展示案と鑑賞シートの作成を開始した。実習では毎年行っている課題で、美術館で所蔵している作品を展示する常設展示案を独自のアイデアで考え、その展示に合わせた来場者向けの鑑賞シートを作成するというものである。実習最終日に学芸員から講評をしてもらい、作成した展示案と鑑賞シートは美術館に保管される。テーマ設定や作品の選出、展示の仕方、キャプションなど考えることが多く大変な作業だったが、面白い展示にしよう、鑑賞者にも楽しんでもらえるようにしようと考えを巡らせることは非常に楽しく、貴重な経験となった。

その後いくつかの講義を受け、中村彝アトリエの見学、学校等教育機関で行っている子供向けのアートバンク、映像を使った鑑賞教育「ハローミュージアム」を体験した。

### ②もっとも勉強になったこと

アートバンクやハローミュージアムなどの鑑賞教育で重要なことは、他の人の意見を聞いたならそれを否定せずまずは受け入れることである。自分では思いつかなかった考えや見方を知ることで自分の発想力も広がり、自分の意見を言う際も他人に受け入れてもらえるという安心感から自信を持つことにもつながる。美術館で働く方々は皆この考えを大切にしており、芸術や美術館に興味を持ってもらいたい心を豊かにしてほしいという願いがあるように思えた。

私はアートバンクやハローミュージアムで実際に体験したことでこの考え方が非常に素晴らしいものだと実感することができた。これは学校や職場など普段の生活でも役に立つ考え方であり、常に相手の立場に立って考え行動することは非常に重要な

ことである。実習を通して美術館についての知識や経験ができただけでなくコミュニケーションについても考えることができ、今後の人生でも生かせる良い経験となった。

## H.S.生

### ①学修の概要

府中市郷土の森博物館（以下実習館と表記する）は府中市に根ざした地域博物館であり、歴史・民俗・自然・天文の4つの分野を持つ総合博物館でもある。広大な敷地内では複数の復元建造物や自然環境の再現を行っている。地域博物館という特徴から家族での利用が多く、子供向けのワークショップや企画が充実している。実習館は多くの特徴を持っておりそれらに則した実習を行った。

初日は実習館に関する座学を受けた。2003年に施行された指定管理者制度は実習館においては2006年から導入した。この政策は民間企業との競合を目的としていたがサービス向上等メリットの反面コスト削減や博物館のノウハウの引き継ぎ等においてデメリットを生じている。現在実習館が積極的に取り組んでいる事業として学校協力事業が挙げられる。博学連携の強化を図るため実習館が行っている取り組みを教わった。

2日目以降は先述した分野ごとに担当の方について実習を行った。歴史分野では資料整理や梱包といった実技を中心に行った。実際の資料（近代古文書）を手に取り記録用紙に必要な事項を記録した。記録した資料は劣化を防ぐ中性紙で作られた封筒に入れ保管される。

民俗分野では実習館で展示している民俗資料のパネル作りを行った。実習館ではパネルやキャプションは学芸員が手作りする事が多く、実際と同じ手順で作成した。ハレパネと呼ばれるボードを適切なサイズに切り予めプリントしたキャプションが書かれた紙を貼り付けて行う。パネルは展示にストーリーをつけ意味合いを持たせている。

自然分野は座学を中心に行った。この分野では本物の自然と触れ合ってもらうことが理想であり展示や講座はそのきっかけとなっている。実習館は2008年に常設展示のリニューアルを行った。その際情報を羅列する展示から府中の自然環境を再現する方式に転換した。

天文分野では展示資料「ロケットペンシル」の解説実演を行った。始めは自分が伝えたいことを中心に解説文を作っていたが地域博物館だということ、対象が小学生だということを失念しており作業は難航した。発表を行って最後には活動を通じて反省会をした。

### ②もっとも勉強になったこと

実習でもっとも勉強になったことは博物館が収集した資料や調査・研究の結果をどう伝えていくかが重要だという点だ。実習を行う前は博物館の意義や機能性を狭い視野で考えていた。博物館は様々な役割を担っているが、その多くは来館者がいて初めて成立する。10日間の実習で一番強く感じたことだ。実習館が来館者のために行っている様々な工夫を学びながら、来館者にとって博物館はどうあるべきかを考えるようになった。

そうした中で天文分野で行った解説の実演を通じて、自分が伝えたい内容と来館者が求める情報のバランスを取るのが難しいことを学んだ。伝えたい情報を伝えることは大切だが、自分の視野だけで考えていると来館者との意思疎通が難しくなる。博物館は社会教育施設だが一方的なものでは教育は成り立たない。来館者にどうアプローチを行っていくかは博物館が機能する上で、また維持していく上で大切な視点だと思った。

## Y.M.生

### ①学習の概要

博物館実習について、初日はさいたま市立博物館で研修を受けたあと4日間浦和博物館で実習を受けた。さいたま市立博物館ではまず内部の見学が行われ、収蔵品が納められた倉庫をめぐり内部を確認。新たに寄贈された品の洗浄と乾燥、ラベルを貼る、写真を撮って記録したあと収蔵と、資料が納められた際の基本的な流れをさらった。続いて掛け軸の取り扱いについて、複製品だが実物を使い経験することが出来た。後者は大学の授業内でも教わった内容だったが、やはり博物館で実際に作業をするスペースで行うと勝手が異なりよい勉強となった。

2日目以降の浦和博物館はリニューアルから間もない建物で、施設の成り立ちや歴史などの解説から始まった。新しい建物の外観は埼玉県師範学校校舎の正面を復元したもので、この校舎の元となった建物はかつて三条実美により「鳳翔閣」と名付けられた建物だった。あくまで復元のため場所は異なるが、一部かつての建材が利用された柱があった。

ここでは主に夏休みの子ども向けに行う体験教室の補助が多かった。イベント会場の開設を手伝い、受付の作業、イベントを見守ることはもちろん、終了後には消毒を徹底するなどコロナ禍特有の経験も得られたように思う。このような夏休みの体験は

私自身も博物館へ行った記憶があり思い出に残るものだ。このような経験が後に歴史や地理への興味を呼び起こすのだと改めて実感する出来事だった。

## ②もっとも勉強になったこと

博物館を毎日開館する上で、ただ施設を開けているように見えて展示に関わる膨大な数の作業が浮かび上がったことだと思う。9時の開館に合わせて開館するが受付にいる間はなかなか気が抜けなかったうえ、展示の入れ替えを手伝う際は二階まで階段での移動が必要になり何往復もすることになった。資料はもちろんモノであり、動かしたり運んだりするためには必ず人の手が必要だ。当然の事だと思っていたが、実際に経験して見ると学芸員は体力が求められる仕事だと思う。

また、夏休みのイベントを手伝った際はそのイベント準備についても詳しく話を聞いた。当日だけでなくどのようなイベントをするかの提案にはじまり、それに必要な全体の予算や参加費を決める工程、そのイベントをどのような方法で告知するのかと事前の段階からかなり考えるべきことが多い。またそれらが決定した後は工作のために必要なもの下準備など、細かい工程がたくさん必要だ。浦和博物館は特に小規模なため多い日でも職員が10人を超す日はなく、たったこれだけの少数で毎日博物館が開いていると思うと頭が上がりません。

博物館としても、毎日の業務をこなしながら新しいことに挑戦するのは大変な上に場合によっては市への報告が必要になるという。制約の多い中で日々どれだけ工夫して足を運んでもらうのか、学芸員としての具体的な考えの持ち方を与えてもらった5日間だったと感じた。



\*\*\*\*\*

## (3) 秋学期における学外実習事後指導、および花蹊記念資料館を使用した事後実習

秋学期も、春学期同様、コロナ感染対策のため、対面授業と遠隔授業の併用となった。

花蹊記念資料館での模擬展示の企画立案については、昨年と同じく、仮想展示とし、次のような進行を採用した。

### 1) 企画立案の態様

企画立案は共同ではなく、各自で行う。模擬展示のテーマは、以下の三つのいずれかを選択する。

- a. 卒業論文に関連する任意のテーマ
- b. 歴史・民俗のテーマ（卒論とは別のテーマ）
- c. 美術のテーマ（卒論とは別のテーマ）

### 2) 展示は、花蹊記念資料館を会場とする。

### 3) 授業担当者と学生は、対面授業と遠隔授業により模擬展示の準備・完成を旨とする（1月の授業最終回まで）。

### 4) 完成した模擬展示案発表（2月の補講期間内 [2月12日]）。

17名の履修生の取り組んだ展示テーマは、以下のとおりである。

No.	展示テーマ
1	桜の絵画の変遷
2	教科書のなりたち—明治前期の国語教科書から見る子ども
3	銀灰色の風景世界—カミーユ・コロアの画業

No.	展示テーマ
4	永遠を生きる姿—いろんなミイラ
5	移ろう着物～貴族社会である平安時代から武家社会である鎌倉時代への着物の変遷～
6	豪華絢爛!江戸時代の婚礼に込められた想い～千代姫と和宮のお嫁入り
7	フェルメールの色彩とは何か
8	「天ぶら—江戸と歩んだ食の歴史—」
9	手ねぐい～その歴史とことば遊び～
10	大正期の働く女性たち—職業婦人の誕生を辿る—
11	信長の駆け抜けた戦国時代
12	サロメの変遷—シノペー福音書からオーブリー・ピアズリーまで—
13	ヴィジェールプラン—国民の敵を描いた宮廷画家
14	人になれないものたち—妖怪の表象
15	「アイヌのイオマンテ」
16	「近代日本の治水事業～日本人と水害155年～」
17	ポスター世界旅行

このうち何点かの展示案を紹介しておくことにしよう。本文中には出品作品(資料)の図版が掲載されていたが、著作権等の問題に配慮して割愛している。

## 松家 有

### 「教科書のなりたち—明治前期の国語教科書から見る子ども」

明治時代が始まってから5年、日本は国家の在り方を見つめなおし、近代国家としての道を歩むための改革に着手する。なかでも教育については、江戸時代と同じままの教養や意識ではとても列強諸国とわたり合えないことが明らかであり、新しい制度を整えることが強く求められていた。日本の近代教育はこの明治5年の学制発布以降、身分を問わず国民全員が学を身に付けるものとして掲げられた。

今回取り上げる国語は、読み書きを教える教科であり、人がなにかを学ぶ上での基礎となる重要な教科でもある。この国語を教える方法がどのように確立したのか、明治20年代までに使用されていた教科書を使って順に解説していく。

制度が設定されたことによる子どもに対する当時の教育方針の変化や、現代では当たり前の教育の段取りがいつ形成されたかの解説も展示で触れられるテーマの一つである。この展示を通して、近代教育が成立した過程を実感してもらいたい。

#### 第一章

学制公布当時はまだ子どもの学習のために作られる専用の教科がほぼ存在しておらず、一般で販売されている啓発書が教科書として政府に指定される形で教材となっていた。有名な「学問のすゝめ」はその教科書として指定された本の一つである。

対して「小学読本第一」「小学読本首巻」の二冊は黎明期に教育専用の教科書として形を持った重要な例だが、これらは日本のオリジナルな教材として制作されたものではない。アメリカで使用される教科書を日本語訳したものだったため、読み書きとしての国語より西洋流の知識を得るための教材として使われた。

まだ子どもが—から国語を学ぶには適さないものだったが、これを原点に教科書は変化していく。

#### 「小学読本」(田中義廉) 解説

ウィルソン・リーダーと呼ばれるアメリカで使用される教科書を翻訳したもので、当時もっとも広く読まれた教科書だとされている。元のものとは比べると、挿絵はそのまま利用されており、文章もほとんど直訳に近い形となっている。その分日本の情

勢や子どもの理解度に対する配慮はないため、後に改正されている。

当時の子どもはこれら教科書の内容を暗唱できるようにすることで知識を文字通り身に付けた。

## 第二章

明治12年には学制に代わり教育令が出され翌13年に改正教育令が出た。ここではとにかく外国の文化を取り入れようとした学制から方向性が変わり、日本の文化や道徳教育が重視されるようになっていく。その結果「修身」「歴史」の比重が増えた。また国語科と教える内容（読書、習字の二科）が「小学校教則綱領」で明記された。これにより国語でも読み書きを担う部分、読み方や作文を習う部分とすみ分けがされるようになり、以降の教科書はこの科目に沿って、分けて制作されるようになる。

明治17年刊行の「小学読本」（若林虎三郎）の1巻と3巻を比べると、学年により中身が難しくなるという仕組みが導入されている。これは明治10年後半から始まった、学びの習熟度による配慮がされるようになった部分である。

### 『小学読本第一』『小学読本第三』（若林虎三郎）解説

第一章の『小学読本』（田中義廉）とは異なり、日本語を教えるための入門教科書として先駆けて出版された教科書である。本書は子どもに初めて漢字を教えることを前提に制作されている。

第一課では「子」と言う字の挿絵と文字の意味を結び付けた後、次第に「此の子」「其の子」と単語数を増やしていく。後のページは単語から短文へと段階を踏む構成となっており、『小学読本第三』まで進むと完全な文章を読めるようになっていく。また文章の内容も森蘭丸の話が取り上げられるなど、日本の歴史や文化に即した内容となっている。

## 第三章

明治18年に森有礼が初代文部大臣に就任する。森は国家のために人は学ぶべきという考えを持っており、これ以降日本は富国強兵をめざし明治27年開始の日清戦争をはじめとする戦争の時代へ向かう。

教科書への影響で見ると明治26年出版の『帝国読本巻之一』で一番初めのページに日の丸が描かれていて、自国を第一とする帝国主義的な傾向が増したと見える。

また教科書内の教え方について注目して見ると、これまではイロハから始まっていた文字がハトなど簡易な片仮名からの学習に変わっている。二章で見られた子どもへの教育的配慮が多くの教科書に広まり、この時代をもって近代教科書の基礎ができあがったと言える。

### 『帝国読本』解説

この教科書は子どもに文字を一から教える教材として成立している。巻之一では「ハタ」「タケ」など直線的で子どもにも書きやすい片仮名から開始し多くの単語を描いたあと平仮名へ移行する。

この教材の巻之一では漢字が出てこない。巻之二の前半で平仮名、片仮名のみで書かれた文章を読めるようになってから、ようやく練習と題して漢字の入った文章が出てくる。これも数字や「人」など現代の小学一年で教えるような簡単なものから始まり、また新出漢字は上部に記載がされているなど、より教えるにあたって丁寧な構成となった。

## 末吉 はづき

### 『大正期の働く女性たち—職業婦人の誕生を辿る—』

大学を卒業したら多くの学生は就職という道を選ぶと思います。学生の間からアルバイトをする人も少なくない現代において働くことは私たちにとって身近なことです。では今から約100年前、大正時代で働くとはどんなことだったのでしょうか。特に女性にとって新しい働き方が生まれたこの時代に「職業婦人」という言葉が流行しました。本展示では近代化という視点から「職業婦人」誕生の背景やその仕事内容、さらに女工まつわる資料を紹介します。それらを通じて近代化が女性の働き方にどのような影響を与えたのか、そしてその実態について考えるきっかけとなれば幸いです。

### 第1章 職業婦人が登場した背景

ここでは職業婦人の誕生を解説します。女性の働き方は大正時代に変化を見せます。明治時代の女性の職業は富国強兵の手段として必要な職種に限られていました。しかし1918年に終結した第一次世界大戦で連合国側について日本は勝利の影響

で大きく経済が発展し、この頃に一般市民が文化や社会の中心を担う「大衆社会」が誕生します。

「大衆社会」の誕生は当時の産業構造に変化をもたらします。新しい職業の誕生によって女性労働者が増加し、そして「職業婦人」という言葉が流行しました。職業婦人に明確な意味は定まっておらず、『婦人公論』では「多少知能を有する職業に携わるところの有識者階級に属する者」という女工等の肉体労働に対比した記述が残されていますが、都会で働く女性一般を称することもあったそうです。

一方で新しい職業が生まれる前から女性は働いていました。しかしそれは家庭の中でのことであり、女性が外に出て働くことは画期的なことだったのです。近代化は人々の価値観にも大きな影響を与えたのです。

## 第2章 多様化する働き方

ここでは職業婦人の代表的な職業を4種紹介します。

### 電話交換手

電話の発信者と受信者を繋げるには交換機が必要ですが、この時代は「交換手」が手で回線を繋げており、その担い手として女性が活躍しました。

電話をかける際はまず交換手を呼び出し、繋げたい電話番号を伝えます。

### ウェイトレス

明治末期に日本初のカフェーが誕生してからその数を増やしていきました。当時のカフェーは作家や画家などの文化人の社交場だったそうです。給仕人は女性が多く、女性の職業として発展していきました。

### タイピスト

職業婦人の花形とも言える職業です。主な仕事内容は手書きの書類をタイプライターを使って清書することですが、内容が誤っていた際に訂正する知識や外国語の理解が求められたため高度なスキルと教養が必要でした。

### 看護婦

看護婦は大正以前から活躍しており、明治維新を皮切りとした富国強兵政策の中で誕生しました。しかし制度は整っておらず看護婦の質の低下にも繋がったため明治末期～大正時代にかけて看護婦教育と自立に向けた政策が進んだのです。

## 第3章 女工

近代化と女工の誕生は密接な関係にあります。明治維新後、政府は国力を上げるために製糸産業に力を入れました。その過程で明治5年（1872年）富岡製糸場が設立されます。主に士族の女子を中心に人員募集が始まり、女工が誕生しました。

富岡製糸場での労働環境は良かったそうで、製糸場の洋風の煉瓦造りに感心する女子も多く憧れの職場だったようです。

富岡製糸場の女工募集はここで技術を得た女子たちからそれぞれの地元へ行う技術の継承を目的としていました。しかし地元の製糸場での待遇は悪いもので、だんだん女工の対象は士族の女子から農民や都市の貧しい貧困層へと変わって行きます。

大正時代になると工場の増加等の理由から女工の募集が激しくなります。募集要項に虚言を交えたり「前借金制度」を理由に退職できない環境を作ったりと労働状況は年々悪化していきました。

近代化によって女性の働き方に多様性が生まれる一方、劣悪な環境で働かざるを得ない女性も存在しました。

## 代表作品

### 第1章

新案明治婦人双六 『婦人世界』5巻1号付録

樹本杭生画/婦人世界編輯局考案

1910（明治43）年 20世紀

所蔵：江戸東京博物館

『婦人世界』という女性向け雑誌の付録だったこの双六は、本展示でも後に紹介する「女工」「看護婦」「電話交換手」など、当時の女性の職業や日常生活を巡ってゴール（上り）である「一家団欒」を目指す形式となっています。職業婦人誕生の黎明期とも言える、明治時代後半における女性の働く様子や生活の様子をよく表した作品です。



## 第2章

海岸通の鈴木商店タイピスト室

大正時代 20世紀

所蔵：鈴木商店記念館

明治時代に洋糖引取商として創業し、大正時代には総合商社へと成長した鈴木商店のタイピスト室の様子を撮影した写真です。大正時代に誕生した女性の職業においてもタイピストは花形であり、今で言う「バリキャリ」的な存在でした。しかし結婚しないという選択肢はない時代でしたので、働く女性たちもいずれは結婚して仕事を辞めて家庭に入ることが殆どです。

## 菊地 春姫

「サロメの変遷—シノベ福音書からオーブリー・ピアズリーまで—」

現代の人々にとって、“サロメ”といえば漠然と「魔性の女」「悪女」といったイメージがあるのではないのでしょうか？しかしサロメの原点を見てみると、そこには容姿の言及はおろか、名前すらも呼ばれない無個性な少女がいるだけなのです。では何故無個性な少女は悪女や魔性と呼ばれ、現代では「ファム・ファタル」の代名詞ともいえるまでの強烈なキャラクター性をもつようになったのでしょうか？

今回の展示でサロメ画像の変遷を辿り、時代背景やその時代の人々の感性を経て形成される「サロメ」イメージを原点から近代まで追っていききたいと思います。

### 第1章 「サロメとは～史実のサロメと初期サロメ画像～」

サロメが初めて登場するのは、新約聖書のマタイ伝福音書第14章14とマルコ伝福音書第6章14である。ここではサロメという固有名詞はでておらず、母ヘロデヤに唆されて踊りの褒美としてヨハネの首をヘロデ王に願う少女として登場する。「サロメ」という名前はユダヤ人歴史家フラヴィウス・ヨセフスの『ユダヤ古代史』に記載がある。『ユダヤ古代史』には特徴的なサロメに関するエピソードはなく、成人して妻となり、未亡人となり、再婚して、三人の息子の母となった平凡な生涯のみ記述されている。史実とされている上記の書物に共通していることは、サロメの容姿や性格について特筆されていないこと、また、洗礼者聖ヨハネを処刑に導くのはサロメではなくヘロデ王の政治的意図あるいはヘロデヤの私怨によるものであるということである。

しかしサロメという名から連想されるイメージ（初代サロメ）と、母ヘロデヤの不倫や聖者への私怨などのイメージが混ざり合うことで、無個性であったユダヤ王女の少女は、時代を追うごとに野心・嫉妬・虚栄・不倫・腐敗絢爛といったイメージを持つようになってしまう。ヨハネ崇拜が起こるとなると一層のこと、聖なる人物との対比が、サロメを悪徳の女に染め上げていったのである。

### 第2章 「サロメの単一化～ルネサンス時代～」

ルネサンス時代に入ると、より風俗的で快楽的な宴会場面をとりあげ、豊満な肉体をもった人間味のあるサロメが描かれるようになる。今回展示するピーテル・パウル・ルーベンス（1577-1640）の《ヘロデの饗宴》（1635-1638）やティツィアーノ・ヴェッチェリオ（1488-1576）の《ヨハネの首を持つサロメ》（1560-1570）では彼らは古代イスラエルを象徴するような衣装でもなく、室内の装飾もビザンティンなどが参照された様子はない。当時のイタリアのモードを身に着けた絢爛で華やかな衣装である。肉感的で豊満な女性美は明らかにルネサンス時代を反映した、現世的な美女の表現である。

そこにあえてサロメと言う主題を選んだ理由は、美女と生首、つまり美とグロテスクの対比による美の相乗効果を期待してのことだろう。生首という存在そのものが死を想起させ、そして、死と生は表裏一体である。さらに傍らに肉感的で魅惑的な美女が待ることによって性へと連想していくことで、より魅惑的な女性美を表現できると考えたのではないだろうか。宴会という五感的な快楽を象徴する場面にあられたサロメは、その国、その時代のモードを身に着け、より生々しい魅惑的な性的身体をもった女性像として象徴的になっている。

### 第3章 「サロメの個性化～近代～」

近代に入ると、もはやヨハネの首すら省略する作品も出てくる。例えばアンリ・ルニョー（1843-1871）の《サロメ》（1870）である。ヨハネの首を待つ彼女の前には皿と短剣があるのみで、ヨハネの首が置かれていない。しかし、ヨハネの首が暗示するまでもなく彼女はサロメであり、完全に宗教的な物語から独立し、彼女自身の意思で微笑を浮かべているのである。ここで気に

なるのは、ヨハネの首を持たない彼女を「サロメ」たらしめているものとは何なのか、ということである。特にルニョーのサロメは短剣が登場することからも、ユディトとの混合がみられる。

それは一重に、サロメに蓄積されてきたイメージ、象徴的意義にあるだろう。「サロメ」と言う名は初代サロメを想起させ、無垢な少女に野心や残忍性を付加した。そしてヘロデヤの娘「サロメ」は母から不倫や淫猥、聖ヨハネへの私怨などの罪を受け継いだ。「サロメ」は歴史のある名前ではあるが、近代にあってはそれらのイメージはサロメという実態に昇華され、象徴化されているものである。そのため必ずしもサロメと言う名前にしがみ付かなくとも、実態が生まれるほどのサロメという個性が出来上がっているのである。だからこそ近代のサロメは一方で自由であり、時代独自のどんな表現も受け入れるキャパシティがある。しかし一方では、地に足のつかない、曖昧な存在に感じてしまうこともまた、確かなのである。

#### 第IV章 「オスカー・ワイルドとピアズリーのサロメ」

オスカー・ワイルドが『サロメ』の初版をフランスで出版したのは1893年2月の事である。それを読んだピアズリーは「お前の口に口づけしたよ、ヨカナン」を描き、それを新鋭雑誌『スチューディオ』に掲載した。掲載した絵がワイルドと出版業者のジョン・レインの目に留まり、ピアズリーは英訳版『サロメ』の挿絵を依頼されることとなった。ピアズリーの挿絵入りの英訳版『サロメ』は1894年に刊行され、多くの話題を呼んだ。ピアズリーの挿絵はテキストをほとんど描写せず、また、性的モチーフが多用されている。明らかな性的モチーフは修正や差し替えを経ながらも依然としてピアズリーの挿絵の主たる要素であり、ヴィクトリア朝社会ではスキャンダルの原因となった。同時代のピアズリーの手がけた作品を見ても、圧倒的に『サロメ』の挿絵は悪魔的でグロテスクなのである。

ワイルドは、『サロメ』の挿絵として提出されたピアズリーの絵を「日本的すぎる」と評した。ワイルドのサロメの源泉は様々な美術や劇、文学にあり、そこからワイルドが抽出したサロメの美はビザンティン的な美しさだった。特にワイルド的にはギュスターヴ・モローの作品が最もビザンティンの美しさを持っていた。しかし、ピアズリーのサロメ像は明らかな性的モチーフによるエロティックさと、その表情やモチーフの悪劣さが際立っている。オスカー・ワイルドのテキストから乖離し、ピアズリーが自由に描き出したサロメはワイルドの描くサロメ像よりも悪魔的で、病的なものとなった。それは明かにワイルドの理想としたサロメではなかった。

#### 代表的出品作

##### シノベ福音書

サロメの“凶像”が初めて登場したのは、6世紀の書物であるシノベ福音書である。シノベ福音書の挿絵「洗礼者ヨハネの生涯」には、白い壁に囲まれた牢獄に侵入してきた男に両手をあげて驚く動作を見せるヨハネと、豪華な台の上に座るヘロデとヘロデヤ、その前でヨハネの首を受け取るサロメが描かれている。ヘロデは手を挙げて驚愕を表すが、ヘロデヤは足を延ばして頬に手を当て、落ち着いた様子で首を見つめている（あるいは、サロメの様子を上目遣いに伺っているようにも見える）。サロメはまっすぐに立ってヨハネの首を受け取ろうと両手を伸ばしており、そこに嘆きや驚きなど特別な感情はみられない。中世まではこのように、聖書の記述を客観的かつ説明的に表した宗教色の濃い作品が多い。

##### ティツィアーノ・ヴェッチェリオ《ヨハネの首を持つサロメ》

この作品には、同じ主人公の顔と構図をもつ三つのヴァージョンの作品がある。その内の一つである「ホロフェルネスの首を持つユディト」に注目してみたい。ユディトは旧約聖書の外典の一つである『ユディト記』に登場するユダヤ人の女性である。宗教の物語である点や女性と生首という組み合わせで美術作品においてはサロメとの似通う点が多く、ルネサンス頃から特に二つの主題の混合が見られるようになる。しかし、サロメは聖ヨハネの悲劇的な死に関わる女性であり、ユディトは敵将を自ら打ち取った英雄である。二人を宗教的に見れば、二人の性質は悪と正義というように正反対であると言える。この宗教的なエピソードを全く無視し女性と生首というモチーフに重点を置き始めたルネサンス時代が、その後のサロメの史実からの乖離、そしてサロメに個性を与える一つのきっかけとなったことは間違いないだろう。

##### ギュスターヴ・モロー《出現》

この絵は背景やサロメの衣装に青が用いられ、宙に浮かんだ血の滴るヨハネの首と相まって不気味さと不安感を煽る。登場しているのはサロメ、ヘロデヤ、ヘロデ、楽器を弾く女、赤いスカートの首切り役人である。サロメ以外の人物たちは衣服を十分に纏い、虚ろな眼差しをしている。薄い衣のサロメは恐ろしい形相で睨みつけてくるヨハネを恐る恐る、しかし、媚びも交えて見返している。しかし、サロメ以外の人物たちはヨハネの首を認識できず、ぼんやりとした眼差しをしている。—このヨハネの首は、サロメにしか視えない幻覚であり、象徴なのである。この絵はユイスマンの『さかしま』で登場し、その中で語られる「出現」は、ワイルドのサロメのイメージに繋がっている。

オーブリー・ピアズリー《お前の唇に口づけしたよ、ヨカーナーン》(1920)

装飾と応用美術の新鋭雑誌『ステーディオ』に掲載し、これをきっかけにオスカー・ワイルドの『サロメ』英訳版の挿絵を依頼されることとなった。作者ワイルドもオーブリーの挿絵に期待し、仏版『サロメ』と共に「僕意外にただ一人、七つのヴェールの踊りがわかり、目に見えないその踊りが見える画家オーブリーへ。」という献辞を贈った。しかし以後英版『サロメ』の挿絵の下絵が出来上がる度に、徐々にワイルドは気分を害し、「習字帳の隅に描いた、たちの悪い落書き」とまで評するようになった。

---

## 高橋 若葉

「近代日本の治水事業～日本人と水害155年～」

キャッチコピー

流れゆく川を見て、人は何を思うのだろう。

展覧会概要

明治時代に近代化政策の一環として行われた「治水事業」とその歴史に関する展示を行う。

治水事業を学ぶにあたり、多くの人材が海外に留学したこと、その人々が帰国してから日本各地の河川整備を行った過程を辿ってゆく。

その中でも、内務省の土木技術を統括する立場として河川と向き合い続けてきた、沖野忠雄、青山士、原田貞介に着目してゆく。

ターゲット層

近代史に興味があるが、今まで土木や治水には関心が薄かった人々に対して。

歴史、文明開化に興味がある人。日本と海外の繋がりに関心がある人。

水害に恐れを感じている人など。

文系の人にも、理系の人にも楽しんでもらえるような展覧会であることを前提とする。

年齢層としては、少々大人向けの展覧会である。

コンセプト

日本は今も昔も水害が多い国である。近世までは、武将や大名がそれぞれの領地の河川整備を行っていた。しかし、明治時代に入って以降は、近代化政策の一環として国が河川の改修を管轄するようになった。

治水事業に乗り出すために、明治政府はドイツやアメリカ、フランスなど様々な国に人材を派遣し、技術を学ばせ、日本各地の河川の整備を行わせた。それらの留学生の帰国後、日本に持ち込まれた西洋技術を使い、行われた堤防の設置や河川整備、ダム建設により、水害ははるかに減っていった。中でも、利根川・荒川・淀川・木曾川は特に大規模な河川改修として知られている。

治水事業に人生をかけ、日本を水害から守ろうとした3人の内務技官 沖野忠雄、青山士、原田貞介の足跡を辿りながら実際に行われた治水事業を学んでゆきたい。

企画意図

近年、大雨による洪水をはじめ、土砂崩れなどの災害が多く見られる。各自治体でハザードマップが作成され、人々の水害に対する意識も高まっている。それと同時に、水に対して恐怖を感じている人も多いだろう。

国家レベルとして水害に焦点が当たったのはつい最近のこのように思われているが、実は何百年も何千年も前から日本人は河川と向き合ってきた。実際、明治時代には国家事業として河川改修に力を入れてきた。

無防備に流れる河川を見て、現代の人は一体何を思っているのだろう。

この展覧会を通して、河川と日本人の共存の歴史を少しでも感じてもらえたら嬉しい。

また、水害に対する危機管理の徹底や、河川から受ける恩恵についても改めて考える機会になればと思う。

ご挨拶文

近年、大雨による洪水をはじめ、土砂崩れなどの災害が多く見られる。各自治体でハザードマップが作成され、人々の水害

に対する意識も高まっている。それと同時に、水に対して恐怖を感じている人も多いただろう。

国家レベルの課題として水害に焦点が当たったようになったのはつい最近のこのように思われているが、実は何百年も何千年も前から日本人は河川と向き合ってきた。

実際、明治時代に入って以降は、近代化政策の一環として国が河川の改修を管轄していた。治水事業を行うために、明治政府はドイツやアメリカ、フランスなど様々な国に人材を派遣し、技術を学ばせ、日本各地の河川の整備を行わせた。それらの留学生の帰国後、日本に持ち込んだ西洋技術により行われた堤防の設置や河川整備、ダム建設により、水害ははるかに減っていった。中でも、利根川・荒川・淀川・木曾川は特に大規模な河川改修として知られている。

この展覧会では、明治時代に近代化政策の一環として行われた「治水事業」とその歴史を取り上げ、その中でも、内務省の土木技術を統括する立場として河川と向き合い続けてきた、沖野忠雄、原田貞介、青山士の足跡に着目してゆく。

この展覧会が、河川と日本人の共存の歴史を少しでも感じて頂く機会となれば幸いである。

## 1章

### 「近代前後日本の水害」

明治時代以前は、大名や武将によりその地域ごとに治水事業が行われていた。しかし、明治維新を経て乱伐が進み、森林が荒廃したことが要因となり、明治10～20年にかけて度々大きな水害に見舞われるようになった。明治18年の水害をきっかけに明治河川法が制定されるようになったが、日本各地での水害は依然として続いてゆく。明治29年には利根川の洪水により江戸川でも氾濫が起り、東京東部の広い範囲に被害をもたらした。さらに、明治43年には集中豪雨による河川の氾濫により、関東だけで769人、東京の被災者が150万人を越える最大の水害が起っている。

この章では、近代前後の大きな水害やその要因について説明してゆく。

## 2章

### 「人類ノ為メ 国ノ為メ」 明治期の海外留学～日本は海外から何を学んだのか～

明治時代に入り政府は近代化を目指すが、そのためには西洋の技術を導入する必要があった。明治初期にはオランダをはじめ海外からお雇外国人に来てもらっていたが、次第に日本人を海外留学させるようになる。医学、法学、芸術、化学など様々な分野において優秀な人材を海外に派遣する。特に、明治4年の岩倉使節団の渡米欧を皮切りに、明治8年以降は留学生が多く渡っていた。渡航先はアメリカ、ドイツ、フランス、イギリスが多かった。

しかしながら、全く言葉もわからぬ異国で学問を修めるのは容易なことではない。

それでも、日本の近代化の為に海外の学問を吸収しなくてはならない学生たちに立ち止まっている暇はなかった。「自分の勉強が1時間遅れればその分日本の近代化は遅れる」(※土木学会古市公威の言葉とされる)それを合い言葉に、海外で学ぶ日本人留学生たちは勉強に励んだと言われている。

※「万象ニ天意ヲ覚ル者ハ幸ナリ 人類ノ為メ 国ノ為メ」は信濃川大河津分水記念碑に刻まれた言葉であり、大河津分水には青山士が携わっている。

## 3章

### 「沖野忠雄、原田貞介、青山士」

明治初期は、オランダをはじめとする諸外国から御雇外国人を呼び寄せ河川改修計画を立てていたが、日本人留学生が帰国したタイミングで、日本人技師がお雇外国人と交代するかたちで河川改修の責任者へと勅任するようになった。

その際の代表的な人物が沖野忠雄、原田貞介、青山士である。この3人は、共通して内務省の技官のトップである内務技監、そして土木学会で重要な責務を担っていた。

沖野は豊岡藩の更進生として大学南校で学び、フランスに留学後、日本では淀川の改修などを行った。

原田は東京帝国大学を中退しドイツに自費留学。帰国後は淀川、荒川改修に尽力した。

青山は東京帝国大学を卒業後渡米。パナマ運河工事委員として従事。帰国後、荒川放水路の建設や鬼怒川の改修を行った。それぞれ出身校や留学先は異なるが、帰国後は同じ職場で同じ時代を作り上げた3人である。

現場第一の沖野、計画性に優れた原田、頭の切れる青山といったように、性格もそれぞれであったが、互いに補い合いながら良いチームをつくっていたと言われている。

お雇外国人に頼るのではなく留学先からそれぞれが持ち帰った技術を使いながら、日本人の手によって日本の河川が整備されてゆく形ができあがったのがこの明治時代である。

この章では、3人のプロフィールや写真を見ながら当時の内務技監の存在を知って欲しい。

## 4章

### 「近代の治水整備～淀川、木曽川、荒川、利根川～」

留学から帰国し、内務省の役人として沖野、原田、青山は河川の改修事業に携わるようになる。内務省在任中、国内で行われた河川改修で3人が関わらなかったものはないと言われるほど、日本各地を回り改修計画を立ててゆく。

その中でも、都市に流れる大きな川として氾濫の度に被害を出してきた淀川、木曽川、荒川、利根川の改修には特に尽力したと言われている。莫大な費用と年月、そして3人の知識と経験を積み重ね、近代日本を作り上げてきた。それにより、東日本、西日本の氾濫による被害も減少し、現在まで続く大都市が形成されていった。

このように、日本の町づくりは災害との闘いである。幾度も工事が行われ、それでもなお洪水による水害は収まらない。

どんなに時代が移り変わろうとも「日本の治水は万全」にはならない。絶対的な安全などどこにもないのだ。だからこそ、現代も国土交通省によって対策は続けられている。我々国民も、水害に弱い国で暮らしているという意識を持ちながら、河川と共存していくことが大切である。

## 主要資料

### 3章「原田貞介履歴書」

原田直筆の履歴書である。内務省に入省する際に提出した物だと思われる。

出身や東京大学時代のことはほぼ記載されていないが、ドイツでの留学時代のことは詳細に記載されている。このことから、当時の内務省が留学経験のある人物を求めていることがよくわかる。また、ドイツの学校名にはふりがなを振っていたり、文字の乱れが見られないことから原田の几帳面さが伝わってくる。

### 4章「木曽川改修の功績に対する岐阜県からの感謝状」

長良川が伊勢湾にそそぐ木曽川三川の下流域は、長良川、木曽川、鱒

明治20～45年にかけて木曽三川の完全分流を目指し、明治政府は当時の国家予算の12%をも投じて改修工事を行った。この計画には、オランダ人お雇外国人のヨハネス・デレーケが関わっており、明治19年に計画が作成された。そこに留学から帰国した沖野忠雄、原田貞介が加わり工事を完成させた。その功績に対する感謝状である。

実際の工事が完成したのは明治45年だと言われているが、この資料を見る限り、明治41年には既に工事の成果が現れていたことがわかる。

\*\*\*\*\*

以下は、模擬展示案発表時の様子

